

のどちらも記号化されていない場合、つまり日本語や中国語の様に不定冠詞も定冠詞も欠如している言語、ギリシア語やバスク語の様に定冠詞のみを持つ言語、そしてルーマニア語や英語の様に定冠詞・不定冠詞の両方を持つ言語の三つのタイプに大きく分けることができ、世界中の言語は細部を別にすればこの三つのタイプのどれかに割り当てることが出来る筈である。⁴⁾また、冠詞の発達を歴史的に考えた場合、まず有標である定の概念が記号化されて定冠詞が出現してゼロ記号と対比される。さらに記号化が進むと不定の概念も記号化されて不定冠詞が現れるという様に単純化して考えることが出来る。従って、定冠詞の発生に対して、不定冠詞の出現は常に或る程度意識的な過程であったと考えられる。

ところで、文法上の情報としては有標である《定》の方が重要であり、より早くその情報を聞き手に伝える必要がある。従って、《定》という概念を表わす定冠詞の機能と、後置という用いられ方の間には最初から矛盾があることになる。この矛盾を少しでも小さくするために、後置という制約内で可能な限り《定》の情報を早く表わす方策を取る、あるいは後置の枠内におさまり切らない時には《不定》の情報を伝えるために後置冠詞以外の方策に訴えるのではないかと、ということが予測される。ただし、《定》の情報というのは文脈・状況に大きく依存するものであり、*afterthought*的にやや遅れて出てくることは可能であり、そこに後置定冠詞というものが存在し得る基盤もあるのである。しかし、《定》を表わす記号が文法化されれば、やはり出来るだけ前にその記号がある方がその機能上経済的でより自然である。ところが、《不定》の概念を *afterthought* 的に遅らせて伝えるというのは論理的に成り立たない。従って、前述したようにその成立が多少とも意識的であったと考えられる不定冠詞が、わざわざ後置されるということはまずあり得ないことになる。

以上の様な一般的考察をふまえて、ルーマニア語の後置冠詞にかかわる現象を見ていくことにする。

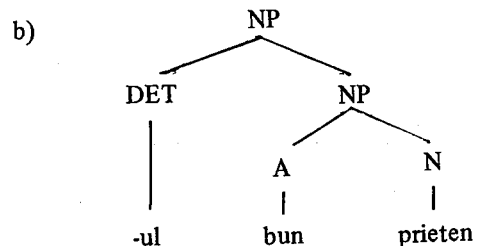
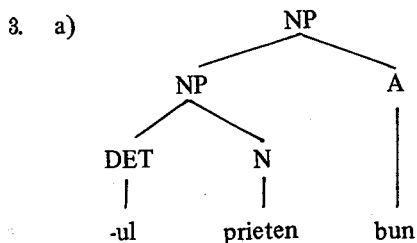
1. 形容詞の前置と定冠詞

ルーマニア語では、フランス語などと同様に形容詞は一般に後置されるが、前置することも可能である。前置・後置のちがいによる文法的・意味的な差異はここでは関係ないので考慮に入れない。名詞句の構造として二つの語順が可能な訳だが、形容詞を前置すると次の(2b)の例文の様に前置された形容詞に後置定冠詞が付き、名詞には定冠詞は付かないという現象が見られる。

2. a) prietenul bun
(friend-the good)

b) bunul prieten
(good-the friend)

この現象について林氏は 形容詞+名詞という語順の時は全体で一種の複合名詞句を構成していると分析されて、次の様な樹形図でそれを表わされた。⁵⁾



- c) *landet* (land-the) d) *det store land* (the big land)

これらの現象は、同じように後置定冠詞を持つ言語が、形容詞前置という状況で少しでも早く《定》の情報を伝えるために見つけ出した解決法であると考えられる。

ところで、次の例を見て頂きたい。

8. a) *Bună dimineața* (Good morning) b) *Bună ziua* (Good day) c) *Bună seara* (Good evening)

これらは挨拶言葉であるが、形容詞＋名詞という構造にもかかわらず、定冠詞は名詞に後置されたままで、先に見た現象の例外となっている。勿論、林氏の規則(4)に対しても例外をなす。しかし、これらの句は常にこの形で用いられ、フランス語の *Bonjour* や英語の *good(-)morning* が一語の様に綴られる様に、諸者の意識の中では一語の様に感じられているため、冠詞が名詞に後置されたままになっているのだと思われる。因みに、スウェーデン語でも常にその組み合わせで使われる形容詞＋名詞という表現や、一つしかないものを表わす表現、つまり定であることが自ら明らかな場合には後置定冠詞だけで第2冠詞の前置は見られない。⁷⁾

9. a) *stilla havet* (pacific ocean-the) b) *franska revolutionen* (french revolution-the)

また、スウェーデン語でも時として形容詞が後置される場合があるが、その場合は第1要素である名詞に後置冠詞がついているので、やはり第2冠詞の前置は見られない。⁸⁾

10. a) *vännen kär* (friend-the dear) b) *stranden grön* (river-bank-the green)

以上の様に、後置冠詞を持つ北欧諸語とルーマニア語の形容詞＋名詞という構造において、全く並行的な現象が見られるということは単なる偶然とは考えられない。

2 指示詞と冠詞

まずルーマニア語の指示詞 *acest(a)* の形を以下に示して、その形を用いた例文で論を進めることにする。⁹⁾ *acest* は名詞に前置されて形容詞的に用いられる時の形であり、語尾 *-a* の付加された形は名詞に後置された場合と代名詞として用いられた時の形である。

	M.		F.	
	N.A.	G.D.	N.A.	G.D.
Sg.	<i>acest(a)</i>	<i>acestui(a)</i>	<i>această (aceasta)</i>	<i>acestei(a)</i>
Pl.	<i>acesti(a)</i>	<i>acestor(a)</i>	<i>aceste(a)</i>	<i>acestor(a)</i>

ここで問題になるのは形容詞的に用いられた場合である。男性名詞 *lup* を用いて実例を示したのが(1)である。ルーマニア語では、基本的には代名詞は名詞に後置される。

11. a) *lupul acesta* (wolf-the this) b) *acest lup* (this wolf)
 c) *lupului acestuia* (wolf-the this-OF/TO) d) *acestui lup* (this-OF/TO wolf)

さて、指示詞と冠詞はその機能上非常に密接な関係にあり、もともと文脈外的 (exophorique) な指示 (référence) を表わしていた指示詞が文脈内的 (endophorique) な指示詞→定冠詞という変化をたどった場合も多く、語源的に両者が関係がある場合の多いことはよく知られている。そして、英語やフランス語に親しく接している者は、この両者が排他的な関係にあることを極く当然の様に考えがちである。しかし、(11)の例が示しているように、ルーマニア語では指示詞と定冠詞は共起し得るし、このような言語はそれほど特殊な訳ではない。スウェーデン語でも(12)の例のように、一般に指示形容詞の付いた名詞は後置定冠詞を伴って用いられる。¹⁰⁾

12. *den dagen* (this day-the)

しかし、これは何も定冠詞を後置する言語に限ったことではなく、例えばルーマニアの隣国ハンガリーのハンガリー語でも指示詞が付くと必ず定冠詞が用いられる。¹¹⁾

13. a) *az az asztal* (that the table) b) *az a könyv* (that the book)
 c) *ez az asztal* (this the table) d) *ez a könyv* (this the book)

この様にルーマニア語やハンガリー語では、指示詞は本来の機能である《指示》だけを表わし、その結果としての《定》は定冠詞によって分担されて表わされている。しかし、言語の経済性から指示詞だけで両者を表わす言語も多いという風に考えることが出来る。

さて、ルーマニア語におけるもう一つの問題点は、(11)の(a),(c)と(b),(d)の間の違いである。ルーマニア語では指示形容詞は後置されるのが一般的だが、(b),(d)の様に前置することも可能であり、その場合には後置定冠詞が現われない。これも、先の形容詞前置の場合と同様に考えることが出来る。(b),(d)の様に指示詞が前置されている時には、それだけで多くの言語に見られるように《定》であることははっきりしているが、指示詞後置の場合には名詞に定冠詞をつけなければその名詞が定であることは、後置された指示詞が現われるまで分からないことになる。そこで少しでも早く《定》の情報を伝えるために、この場合には名詞に後置定冠詞が付くのである。従って、常に《指示》と《定》を別々の語で表わしているハンガリー語のタイプと、常に指示詞で両者を表わす英語やフランス語のタイプとの中間にルーマニア語は位置していることになる。

	ハンガリー語タイプ	ルーマニア語		英語・フランス語タイプ
		指示詞後置	指示詞前置	
《指示》	指示詞	指示詞	指示詞	指示詞
《定》	定冠詞	定冠詞		

ルーマニア語の指示詞についてもう一つ見ておかなければならないのは、後置された場合には代名詞的用法の場合と同様に *acesta* と *-a* の接尾された形をとる点である。比較のため以下にそれぞれ

の場合の実例をあげた。

14. a) Colegul *acesta* este francez.
(colleague-the this is French)
Cf. *Acest* coleg este francez.
b) *Acesta* este colegul meu.
(this is colleague-the my)
c) Ce este *acesta*?
(what is this ?)

この接尾辞 -a は、起源的にはやはり定冠詞に由来するのではないかと思われる。ただし、この定冠詞は不定形容詞を代名詞化する働きを持つ定冠詞と並行するものと考えられる。

15. a) *acest* → *acesta* b) *alt* → *altul*
c) *un* → *unul, una*
Cf. *un* → *l'un,* *altre* → *l'autre*

それではどうして後置された指示詞が代名詞の形をしているのだろうか。一つの可能性として、次の様に考えることが出来る。この指示詞は、代名詞として *afterthought* 的に名詞のあとに添えられたものが固定化したもので、起源的には代名詞であったので -a が接尾されているのではないだろうか。歴史的変化を図示すると次の様になるだろう。

16. [[*lup*]_N [*ul*]_{DET}] NP || [[*acest*]_N [*a*]_{DET}] NP
↓
[[*lup*]_N [*ul*]_{DET1} [*acesta*]_{DET2}] NP
(|| はポーズを表わす)

3. 数詞と冠詞

ルーマニア語では名詞に数詞が付いた場合、後置定冠詞を伴うことは出来ない。そのかわりに形容冠詞とも呼ばれる *cel* 型の冠詞を名詞句の最初に置く。¹²⁾

17. a) *cei* trei oameni b) * *trei* oameni
(the three men) (three men-the)

これも形容詞前置の場合と同様で、数詞が付いて長くなった名詞句において、《定》の情報を早く伝える一つの解決策であると考えられる。例えば次の様な例で、*cei* ではなく名詞に後置冠詞が付いて《定》を表わすとなると、その伝達上の不都合はかなり大きい。

18. Au venit *cei* trei buni prieteni.
(have come the three good friends)

それでは、どうして前置された形容詞の場合の様に、数詞に定冠詞を後置出来ないのだろうか (cf, (17b))。たまたまルーマニア語にはその様な制約があるのだと言うしか仕方がない様にも見えるが、あるいは序数詞の構成法と関係があるのかもしれない。ルーマニア語では序数詞は、属格冠詞とも呼ばれる *al* 型の冠詞を前置してその後基数詞に後置冠詞起源と思われる要素を付けて作る。¹³⁾

19. *al treilea / a treia* (the third one m./f.)

もし *trei* に後置定冠詞の男性複数形を付けたとしたら **treii* であって、形の上では(19)とは異なるが、構造上はどちらも基数詞+定冠詞で同じになる。このことが、基数詞の場合に後置定冠詞が付けられない理由かも知れない。

次に序数詞が名詞に付く場合だが、やはり後置される場合と前置される場合があって次の例のようになる。

20. a) *anul al doilea* c) *clasa a treia*
 (year the second) (class the third)
 b) *al doilea an* d) *a treia clasă*
 (the second year) (the third class)

序数詞の場合も、後置の時には名詞に後置定冠詞がついて《定》の情報が序数詞を待たずに示され、前置の場合には名詞には定冠詞は付かない。序数詞が付いた名詞句は、本来的に概ね定であるので、名詞に序数詞が前置されている場合にはそれだけで《定》の情報を表わしていると考えられる。また、形態的にも属格冠詞の *al* と後置冠詞という二つの《定》を表わす要素が含まれている。ルーマニア語には、次例の様に序数詞に更に *cel de-* を先立てる形もあるが、後置定冠詞との共起関係は(20)の場合と同様である。この場合には、*cel* も含めて三つの定を表わす形態素があることになる。

21. a) *anul cel de-al doilea*
 b) *cel de-al doilea an*

因みに、スウェーデン語においても序数詞の付いた、つまり序数詞の前置された名詞には後置定冠詞は付かない。

22. a) *andra hand* b) *förra veckan*
 (second hand) (last week)

4. 所有形容詞と定冠詞

フランス語や英語では、所有形容詞も冠詞と排他関係にある。従って、フランス語で *mon cher ami* と言った時、この *mon* は《定》と《所有》の両方を表わしている。

23. *mon ch r ami*
 le *mon*

この事は、比較級表現に定冠詞を付けて表わされる最上級表現に所有形容詞が付いた場合に一層明らかである。

24. *le plus cher ami* → *mon plus cher ami*
 mon *le*

ロマンス語の中では、イタリア語が一般に冠詞と所有形容詞を共起させるし、フランス語でも、古い時代にはイタリア語的な表現が可能であった。

25. a) *la mia casa* b) *li miei amici*

ルーマニア語でも、一般に後置される所有形容詞の付く名詞は、後置定冠詞を伴っている。

26. a) *casa mea* (house-the my) b) *prietenu^l meu* (friend-the my)

この後置定冠詞は、やはり《定》の情報を早く伝えるためのものであると考えられる。そして、予測通り、所有形容詞が前置されると後置定冠詞は現われない。

27. a) *calul tău* (house-the your) c) *casa ta* (house-the your)
 b) *al tău cal* (the your horse) d) *a ta casă* (the your house)

ここで注意しなければいけないのは、*calul tău* に対して *tău cal* とは出来ないことである。この場合には、常に属格冠詞とも呼ばれる *al* 型の冠詞を前置させなければいけない。

LOMBARD (1974)によると、所有形容詞の付いた名詞に形容詞が付くと、以下の様に10通りの表現が可能である。

28. a) *calul tău frumos* (frumos = beautiful)
 b) *calul tău cel frumos*
 c) *frumosul tău cal*
 d) *frumosul cal al tău*
 e) *calul frumos al tău*
 f) *calul cel frumos al tău*
 g) *al tău cal frumos*
 h) *al tău cal cel frumos*
 i) *al tău frumos cal*
 j) *cel frumos cal al tău*

これらの表現はすべてが同程度に使われる訳ではなく、特にg)以下の表現は稀だということであるが、いずれの形においても最初に定を表わす要素 (*al, cel*) があるか、最初の要素に後置定冠詞が付いており、本論の主張を裏付けている。

24)の表現は、文脈によっては比較級なのか最上級なのか二義的な場合があるが、ルーマニア語では最上級は *cel* 型冠詞によって表わされるので、フランス語の場合のような曖昧さは見られない。

29. a) *fratele mai mare* (比較級) b) *fratele cel mai mare* (最上級)
 (brother-the more big) (brother-the the more big)

5. ま と め

もう一度主要な点をまとめると、ルーマニア語の名詞句においては、形容詞、指示詞、序数詞、所有形容詞が名詞に後置されている時には、名詞句の第一要素である名詞に後置定冠詞が付けられる。しかし、形容詞、指示詞、基数詞、序数詞、所有形容詞が前置された時には《定》の情報を出来るだけ早く示すための方策がとられる。その機能が定冠詞に最も近い指示詞の場合は指示詞そのものが《定》を、形容詞の場合は形容詞に後置定冠詞を付けることにより、基数詞の場合は *cel* 型冠詞を用いることにより、そして結果的には一般に《定》を表わすと考えられる序数詞、所有形容

b) L-am văzut pe băiatul care te-a lovit.

(him-I-have seen AM boy-the who you-has hit)

これもやはり、関係節に由来する後方照応的な定冠詞であることは明らかである。その証拠に、関係節が非制限的だと(33)のように、目的語に冠詞を付けると非文になってしまう。

33. *L-am văzut pe băiatul, care dealtfel e alcoolic.

(him-I-have seen AM boy-the, who by-the-way is alcoholic)

また、この場合には、目的語の名詞が定であることは名詞に冠詞が付いていないという「消極的」方法によってだけでなく、動詞接辞の弱形代名詞という「積極的」方法によっても表わされていることになる。

以上で明らかになったように、ルーマニア語は《定》の記号化において、一貫して分析的な傾向を示している。これは、他のヨーロッパの諸言語の多くが、あるいは他のロマンス諸語がどちらかといえば経済性を重視した記号化を行っているのと比較して、ルーマニア語の大きな特徴となっている。しかし、ルーマニア語はルーマニア語なりに、前置vs後置という対立の中で、情報伝達上より効果的で経済的な方法を作り上げている点も明らかになった。春木(1984)でも見たように、とかく特異性ばかりが強調されがちなルーマニア語の統語上の諸問題も、一般言語学的観点から十分納得のいく説明のつくものが多い。言語の普遍性を念頭において言語のタイポロジーを考えると、言語の限定詞体系のあり得る姿を規定するスケール上に、ルーマニア語の場合も相応の場所が与えられているのである。

(註)

- (1) 興味のある方々のために、ルーマニア語の冠詞の歴史的発展に関するものも参考文献に挙げておいたので参照されたい。また、現代ルーマニア語の冠詞については林(1983)がもっともまとまった文献なので、ルーマニア語の冠詞に興味のある方はまずそれを読まれることをお勧めする。
- (2) 例えば、男性定冠詞単数形は -1 で、1 の前の u はつなぎの母音とするのが一般的だが、ここでは語幹以外の部分を冠詞と考えることにする。ついでながら、女性名詞単数形の属格・与格形は複数形にしてから冠詞 -i を付けると説明されることが多いが、これは *casai* > *casei* のような逆行同化が起こった結果と考えれば説明がつく。そして結果的に複数形の語幹と同形になったのである。(語源的にはどちらも *casae* にさかのぼるのであるから、これは当然のことである。)
- (3) 筆者は未確認であるが、デンマークの言語学者 Brøndal が *Essais de linguistique générale* (1943, Copenhagen: Ejnar Munksgaard) の中で同様のことを述べているらしい。
- (4) さらに細かく見れば、ゼロ冠詞があるかどうか、不定冠詞複数形があるかどうか、部分冠詞があるかどうか、といった違いもあるが、ここでの議論からはこれらはむしろ2次的な問題である。岸本(1983)でも同様の分類が行われている。
- (5) 林(1983) p, 88。
- (6) 他の北ゲルマン諸語でも同様のことが見られるのは言うまでもない。また、スウェーデン語でもデンマーク語でも定の時には形容詞も変化して(スウェーデン語では定形 -a ;デンマーク語では弱変化 -e)、丁度ルーマニア語の前置された形容詞に付いた後置定冠詞と同じ働きをしていることになる。

- (7) ただし、この場合でも、形容詞が定形-aである点がルーマニア語とは違っている。
 (8) この時には形容詞も定形ではなくなる点に注意して頂きたい。
 (9) 勿論、他の代名詞についても事情は同じである。
 (10) ただし、文語的な指示詞 *denna* の付いた名詞には後置冠詞は付かない。

denna kvinna

(This woman)

- (11) ハンガリー語では、定冠詞は指示詞 *a* と全く同形 (*az* は母音の前の形) であるが、(13c) (13d) から分かるように、指示詞+冠詞+名詞の順である。
 (12) *cel* の主格・目的格の変化は以下の通りである。

	男性	女性
単数	<i>cel</i>	<i>cea</i>
複数	<i>cei</i>	<i>cele</i>

- (13) *al* の変化は以下の通りである。

	男性	女性
単数	<i>al</i>	<i>a</i>
複数	<i>ai</i>	<i>ale</i>

- (14) 現代ルーマニア語では後置冠詞の付いた名詞の後では(30a)のように属格冠詞 *al* は用いられないが、古い時代にはその場合にも *al* が現われ、*prietenul al vecinului* のようになった。

(参考文献)

Lombard, A. (1974) *La langue roumaine : une présentation*. Paris: Klincksieck.

Sandfeld, Kr. (1930) *Linguistique balkanique*. Paris: Klincksieck.

岸本通夫 (1983) 「ロマンス語と冠詞」ロマンス語研究 15・16号 p.42-47

林 博司 (1983) 「ルーマニア語における冠詞について」ロマンス語研究 15・16号 p.78-94

春木仁孝 (1984) 「ルーマニア語における目的語の代名詞による二重化について」ロマンス語研究 17号 p.39-51

*

*

(ルーマニア語の冠詞の歴史に関するものを少しあげておく)

Graur, A. (1929) "A propos de l'article postposé", *Romania* LV, p. 475-81.

(1934) "Notes sur l'article postposé en roumain", *Romania* LX, p.233-37.

(1937) "Autour de l'article postposé". *Bulletin linguistique* V, P. 204-18.

Puşcariu, S. (1971) "Zur Nachstellung des rumänischen Artikels", *Zeitschrift für romanische Philologie* 57, P.240-74.